

印南野の

赤ら柏は 時はあれど

君を我が思ふ 時は実無し

安宿王(巻二十・四三〇一)

『万葉集』の題詞・左注によると、この歌は天平勝宝六(754)年正月七日に平城宮の「東の常宮の南の大殿」で開かれた宴席において、安宿王が奏上したとあります。この宴には孝謙天皇・聖武上天皇・光明皇太后が臨席しており、天皇が主宰する公式の宴でした。

この頃、毎年正月七日にはその年の邪気を払うとされた青毛の馬を宮中の庭で牽き回す「青馬節会」(平安時代以降は「白馬節会」と表記)という行事が催されており、この青馬節会に伴う宴で孝謙天皇に奉られた歌ということとなります。平安時代に成立した法典『延喜式』によ

やまと
万葉がたり

ると、五月五日の端午節会や九月九日の重阳節会などでは播磨国(現在の兵庫県南西部)から柏の葉が宮中に届けられ、節会の宴で出される食事の器として用いられました。

よって「印南野の赤ら柏」とは、青馬節会の宴のために播磨の印南野から届けられた柏の葉を指すと考えられます。印南野は現在の明石市・稲美町・加古川市・高砂市の一帯に広がる台地を指し、古代には乾燥に強い柏の樹が多く生えていたとみられます。柏はブナ科の落葉樹で、秋には紅葉するものの翌春の新芽の季節まで葉が落ちないために縁起が良く、植物とされ、古くから利用されました。歌を奏上した安宿王は長屋王の子で、母親が藤原氏の出身です。

【訳】印南野の赤く色づく柏の葉は時期が決まっているけれど、我が君を慕う心に決まった時期はありません。

たため、神亀六(729)年に起こった長屋王の變の後も罰せられずに生き長らえしました。この当時は播磨守(播磨国の長官)の任にあり、節会に使う柏の葉を送り出した側の責任者でした。そうしたことから宴席に供された柏の葉に目を留めて、このような歌を披露したのでしょう。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

|| 次回は31日

桜花

時は過ぎねど

見る人の 恋の盛りと 今し散るらむ

作者未詳(巻10・一八五五)

られています。そして、咲く桜の例と同じくらい、散る桜を詠む例があります。

桜の開花に心浮き立ち、満開の桜に心奪われ、舞い散るさまを切なく惜しむ気持ちは、今も昔も全く変わるところがありません。散る桜を見かけたら、ぜひこの歌を吟(うた)いでいた

だいたいと思います。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

|| 次回は4月14日

「持統桜」をご存じですか？ 県内では薬師寺と万葉文化館の二カ所にしかない、持統ゆかりの貴重な桜です。遡ること1300年以上前、大宝二(702)年に持統天皇が三河に行幸したことが『続日本紀』・『万葉集』の記述からわかります。

その際に持統ご自身で植えられたとの伝承を持つ枝垂れ桜が、愛知県岡崎市奥山田町にあります。その桜を親木として、枝から育てられたのが当館の「持統桜」です。2012年の植樹の時には細かった枝も年々太くなり、若いながらもしっかりと花を咲かせてくれます。皆様にご覧

やまと
万葉がたり

ただきたいところですが、この記事が掲載される頃には早咲きの「持統桜」は散り過ぎ、ソメイヨシノも散り始めているかもしれませぬ。そこで今回は「散る」桜の歌を選びました。

季節ごとに分類された巻十一「春の雑歌」のうち、「花を詠む」との題で集められた中の

【訳】桜花の時は過ぎていないけれど、見る人が恋しがる盛りだと、今こそ散るのだろう。